

インターネットで使える「easyCollaboration」により社内外でのクリティカルかつ柔軟で安全な文書共有と交換が可能に

「Collaboration（コラボレーション）」と言えば、携帯キャリアとアニメメーカーが共同して新たな携帯端末を発売するといった話題を思い出します。企業活動においても、設計書や企画書など社内外の関係者とひとつの文書を共有したり交換したりという共同作業の場面が多々ありますが、これら共同作業における文書の共有や交換を『コラボレーション』として位置付け、「安全に簡単に文書の共有・交換」が行える仕組みを提供します。

業種を問わずニーズ高まる文書共有管理

コンピュータシステムの普及とネットワーク技術の進歩により、遠隔地を含む社内外の関係者で情報や文書を共有・交換して共同作業する「コラボレーション」の場面は、業種や業務、企業規模を問わず企業活動において重要性が増しています。同時に、J-SOXやコンプライアンス、情報漏洩防止などを背景に、文書の共有時の安全性も強く求められています。

また、文書を社内外の関係者と共有・交換する場合は電子メールを使用するケースが多く見られますが、電子メールは送信元から送信先への一方通行の伝達であり、共有・交換した文書の履歴を管理できないため、次のようなケースが懸念されます。

- ・見積書を入手して発注する業務の場合、見積り段階の交渉経過（履歴）や経緯などの証明が簡単ではないため、下請法などのコンプライアンスに対応できないケース。
- ・設計書や企画書などを共有・交換する場合、間違った宛先にメールを送ってしまう事故や、送信した文書が送信先の人から別の人に渡ってしまうことにより情報漏洩に至るケース。
- ・電子メールはその仕組み上、十分なセキュリティの下で送受信されてはいないため、送信元から受信先に辿り着くまでの間で情報が盗聴されるケース。

セキュリティを確保した上で手軽に文書共有・交換と履歴管理を実現

このように、企業活動におけるコラボレーションには、コンプライアンスやセキュリティに関する数多くのリスクをはらんでいます。また「どれが最新の文書なのか」、「誰がいつ編集したのか」、「どういったコラボレーションが行われたのか」といった文書の

履歴管理も煩雑になりがちです。

そこで、さまざまなリスクを可能な限り排除しつつ、履歴管理の煩雑さを解消するために、手軽に安全に文書の共有・交換を行い、その履歴を自動で管理する仕組みを提供するのが、「easyCollaboration」です。

easyCollaborationは、インターネット上にセキュリティを確保した「コラボレーションの場（ワークスペース）」を提供します。このワークスペースにコラボレーションを行う社内外の関係者を限定するとともに、アクセス権（参照可否／編集可否）^(注1)を定義した文書を登録してコラボレーションを開始します。文書の編集（更新／改訂）が行われた場合は、自動的に変更前後の文書が管理され、参加している社内外の関係者は必要に応じて最新の文書と変更の履歴を参照することができます。

また、コラボレーションの結果、最終的な文書の確定を行いコラボレーションの履歴とともに、最終確定の文書も一元的に管理することができます（図-1）。

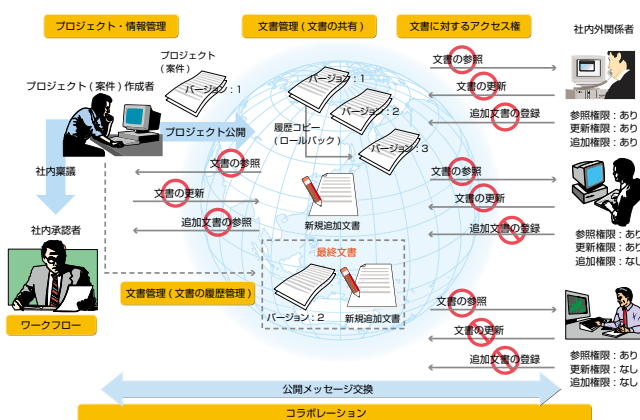


図-1 easyCollaborationの概要

easyCollaborationの主な機能と特徴は次のとおりです。

- (1) インターネットを介して、十分なセキュリティの下での文書共有・交換を実現

(2) 3つの局面から安全な文書の共有・交換の仕組みを提供

a) システムセキュリティ

ファイアウォールやSSL暗号などシステムに関するセキュリティ

b) 情報セキュリティ

文書自体の暗号化や文書に対するアクセス権など文書に対するセキュリティ

c) ヒューマンセキュリティ

参照権限者への自動PDF生成など悪意を防止するためのセキュリティ

(3) 使い慣れたWindowsエクスプローラ風の操作画面など、マニュアルレスを実現した分かりやすいユーザインタフェースを提供(図-2)

(4) 文書の同時編集を防止する仕組み(排他制御)を実現

(5) 共同作業を行うにあたっての社内稟議も電子化するワークフロー機能を搭載

(6) 共同作業に必要な問い合わせなどを実現するメッセージ交換機能を搭載

(7) 当社の既存SIコアシステムをベースに安定したシステム稼働を提供

(8) Microsoft Windowsプラットフォームをベースに軽快なシステム環境を実現

(9) 業種や業務ごとに異なる用語への対応や追加機能の開発など優れたカスタマイズ性を実現



図-2 easyCollaborationの画面例

ます。

これまで当社では、開発委託先を含むプロジェクトメンバー間でシステム開発に係る文書を共有・交換する場合には、情報セキュリティの確保も含め非常に手間がかかっていました。プロジェクトメンバーの進捗を個々に集めてスケジュール管理する作業が煩雑であったり、意思疎通や伝達不足によってプロジェクトメンバー間で文書のバージョンを取り違えたりといった事故も発生していました。

これらの問題を解決すべく、当社では販売に先駆けて開発委託先の1つである中国の東軟集団との文書共有・交換の仕組みとして、easyCollaborationを導入・活用しています。ファイルサイズを気にせずに安全に手軽に文書を共有・交換できるだけでなく、スケジュール管理などはしかるべきアクセス権のもとでプロジェクトメンバーが直接編集できることにより管理の煩雑さから解放されています。また、文書のバージョンを取り違える事故も大幅に減ってきました。

このほか、短期間しかプロジェクトに参画しないヘルプ要員には、PDFファイルだけの参照を許可することによって、人為的な情報流失防止の効果も見込んでいます(図-3)。

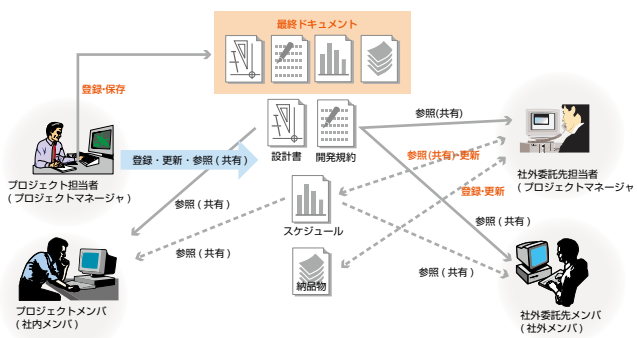


図-3 中国・東軟集団とのコラボレーション

easyCollaborationは、2007年秋より販売を開始し、今年から本格的な販売活動を展開しています。現在、自社導入事例をもとにした改善や便利機能の追加など、バージョンアップを図るとともに、DRM技術^(注2)により、文書自体に権限を持たせるといった機能の拡張も検討しています。

(第三SIソリューション事業部 野瀬克紀)

(注1)：文書が登録された時に自動でPDFファイルを作成、参照権限しかない社内外関係者にはPDFファイルが共有される。自動で作成されるPDFファイルは、「印刷禁止」「ウォーターマーク付与」などのオプション指定が可能。

(注2)：Digital Rights Management。文書や動画などのコンテンツにおける著作権を電子的に保護する技術。

自社での活用事例をバネに積極的な販売を

当社のようなシステム開発を行う現場では、設計書などの大量の文書を開発委託先を含むプロジェクトメンバーと共有することが必要になります。また、プロジェクトメンバー全員の進捗をスケジュール管理にまとめたり、開発委託先の成果物のレビューや検査を実施したりと、さまざまな文書が共有・交換されます。また、経過管理も含めて文書の履歴を管理することも必要となり